



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	千葉 恵「アリストテレスと形而上学の可能性：弁証術と自然哲学の相補的展開」
Author(s)	小沢, 明也
Description	
Citation	哲学, 38, 149-154
Issue Date	2002-07-21
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/48024
Type	departmental bulletin paper
File Information	38_149-154.pdf



《書評》

千葉恵 『アリストテレスと形而上学の可能性』

―弁証術と自然哲学の相補的展開―（勁草書房）

小沢明也

本書は著者が苦難の途を break through した果てに価値ある「ゴール」を見いだした記念碑的作品である。その記念碑としての価値は、アリストテレスのテクストの綿密な分析と「二千年」を超えるアリストテレス研究との格闘とその超克に裏打ちされている。この厳格な態度は著者の師である D. Charles 氏の見解に対しても貫かれており、読者は著者が師の見解を乗り越える場面をしばしば目の当たりにするであろう。また著者はアリストテレス研究内部の問題ばかりではなく、いまここでアリストテレスを研究する意味も考察している。その現代的意味は、学問・教養の起源を实地に知ることができ、特に彼の形而上学において「文理融合の根源的なモデル」（vi 頁）いわば複雑系を見いだす仕方が目の当たりにできることである。この見解はリップ・サービスでは決してない。というのも、アリストテレスの体系自体があらゆる学問分野において実在・本質を研究する態度・方法を教えてくれるからであり、本書はその研究態度こそ主問題としているからである。アリストテレスの思索の途を誠実に歩むことは、真摯に学問研究をしていく姿を教えてくれるのである。

著者が描く神聖な「カテドラル」たるアリストテレス体系とは、ロギコース、アナリュティコース、ピュシコースという三様式によって構築されている。これらの方法の内部構造を展開してみせることが、アリストテレス哲学の要たる實在・本質を明らかにすることであるとともに形而上学の可能性を示すことにつながるものである。換言すれば、著者は、オルガノンとしての弁証術から目的論としての自然学、そして実体・存在研究としての形而上学へというアリストテレス研究における従来のアプローチの根源に、ロギコース、アナリュティコース、ピュシコースという三支柱を見いだしたのである。当初、著者はロギコースのあり方のみからアリストテレスの体系における「ト・ティ・エーン・エイナイ」（本質）全体を説明するという着想を得たが、これではプラトニズムに陥りかねないという批判を受け、アナリュティコースを介するロギコースとピュシコースの相補性という着想を得たそうである（四〇六頁）。そのためか、ロギコースが学の土台となる傾向が強い気がするが（六九頁参照）、これは著者自身の哲学を表しているであろう。

まず、ロギコースは、従来では「論理的に」と曖昧に処理されてきていたが、著者は「形式言論構築的に」もしくは「いかに語るべきか」に関わる非因果的なあり方と新たに規定しなおす（序章・5）。さらに、ロギコースという手法は「いかにあるか」という存在の問いに進み、プレディカビアの一つの固有定義によって示される本質の問い、すなわち「Xは何であるか」を問う手法につながる。その問いに「まさにXであるところのもの」と答える仕方に表されるように、この問いは自体的同一性の陳述を基盤に置く。形式言論構築的に「Xであることはいったい何であつたか」と問い直す言論的形式が、「ト・ティ・エーン・エイナイ」という答えの形式を生んだ上にこそ、それが一なる本質ないし実体を意味することが可能になった（第三章）。本質というあり方は第一義的にはロギコースにあり、実体範疇に属する非因果論的概念・固有定義であり、ピュシコースにはないという主張が、本著のテーゼの一つである。ロギコースという手法は同一律や矛盾律といった論理規則を土台とし、存在の一般的な分析である範疇とプレディカビアを用いて、自然のあり方に左

右されず「存在や生成について無時間的な次元において言語分析する」(五一頁)手法なのである。

次に、アナリユティコースの手法とは、ロギコースが原因に直接には無関係だったのに対して、学問一般において諸々の原因(本質、形相、根拠)を探求し論証する手法である。アナリユティコースの手法が論証である以上は論理規則や範疇やプレディカピリアを用いるわけで、「弁証術の理論化の方法」(三六二頁)による存在分析ないしロギコースに基づいている。実際、『分析論』が主題とする三段論法はプラトンの存在分析法たる分割法や問答法やイデア探求法にその起源を批判的ながら持ち、その批判を補う数学的な比例論をも起源として持っている(第二章)。「何であるか」が「何故にあるか」と同一視される原因探求の論証において、その原因は三段論法の中項として探求されるという点では、三段論法の探求はアナリユティコースな領域に属する。アナリユティコースの手法に関して、三段論法の中項を探求する手法は自然学的著作に現れないし形相質料論は『分析論後書』に現れないので、『分析論後書』は「科学方法論を記述していない」(八〇頁)という見解に対して、著者はあくまで『分析論後書』を存在の根拠の科学的探求論と解する。というのも、原因を質料形相の観点から探求するという見解は『分析論後書』には現れないが、その観点を可能にするのは『分析論後書』の立場、すなわち事物の本質を因果論的枠組みに取り入れ、いかに探求するかを論じることだからである。『分析論後書』における探求論の構築はアリストテレスにおける因果論的展開と呼ぶことができる」(第Ⅱ部(第四章)二六七頁)。第Ⅰ部の形式的な次元にある弁証術の方法と第Ⅲ部の自然世界の根拠の探求法とを架橋する論証と定義の理論獲得の探求論・方法の核こそ、アナリユティコースの手法である。

最後に、「ピュシコース」は自然(「時空上アクセス可能な領域」(八六頁))に関わる諸科学の手法、すなわち「運動するものに関わる個別諸科学において用いられる手法」(二〇頁)である。ロギコースな手法のみでは、悪しきプラトニズムのように内容空疎な議論に終始する可能性がある。現象を観察することなしに、この世界における事物の本質を明らかに

することはできない。他方、ピュシコスな探求は学である以上はロギコスな次元なしにはあり得ない。言葉上の自体的同一性というロギコスな「X」であることはいったい何であったか」だけでは、この世における本質（形相）を何も得られないし、現実世界における本質を示すピュシコスな形相だけでは学的には語れない。両者が相補的にあるからこそ、学は成立し、発展していくのである。ただし、ロギコスな手法は、「現実世界において事物、事象の一性を根拠づけるものを四原因のうちに探すピュシコスな探求のガイドをなすものである」（七二頁）。三つの手法のうちでもロギコスな手法が基盤になっている。言語分析を非時間化することによって形式言論構築術は打ち立てられ、学のオルガノンが成立し、そのオルガノンを用いることによって諸学が成立するのである。『分析論後書』の主目的は「科学的な理論と実践を哲学的な基礎のもとに打ち立てること」であり、この存在論を基礎にする科学的方法論をもとにしてこそ、「ピュシコスな営みを知識形成の営みの全体像の中で位置づける」ことが可能となる。このことから、著書全体の最大の主張、すなわち「自然学が哲学に基礎づけられていること、そしてさらに自然科学上の知見が哲学的な存在の総合的な理解にフィードバックとしての機能を果たしうる」ことが導かれる（七五頁参照）。

以上は本書の第Ⅰ部からⅡ部までに対応し、主に弁証術の方法と論証理論および科学方法論であったが、第Ⅲ部から今までの基礎作業をふまえて「存在の構成原理の分析である質料形相論と存在の様相的な分析である可能現実態論による因果論的展開」（三六二頁）によって「目的論的生物事象および魂」を考察する。第Ⅲ部における主張点は、質料形相論が最大限に発揮される生物学的研究を考察することによって、「事物の本質を開示する目的論的自然観が、事物の存在の十条件を特徴づける機械論的自然観」と両立すること、目的論的説明が現代科学においても不可欠であること、アリストテレスの質料形相論は「形而上学的思索と個別科学の実践のフィードバックのうちに構築」（三五八頁）されることである。第五章において、生物事象の生成は「目的と必然性の相補性の理論」（三二二頁）によって説明される。すなわち、自

然物を質料的に分析することによって、自然物の存在と生成の必然性を物理的に説明することはまず科学において必要であるが、環境への適合性や生存のための価値を説明するのは唯物論的説明ではなく目的論的説明なのである。事物の本質を説明するためには、物理的かつ目的論的説明が必要なのである。第六章において、魂の定義をめぐって心身論のパズルやBody-bodyアポリアを解決することを通して、質料形相論・可能態現実態論もまた実体の探求すなわち「生きているということはどういうことか」の探求であることを得る。このことは、生の考察が形而上学構築に実例を与え、「形而上学的思考が自然研究の方向づけをする」(三五六頁)ことにつながる。終章において、魂論までの探求が存在と本質をめぐって行われていたことをふまえて、本質や存在の身分・根拠・原理を問う普遍的存在論としての形而上学の可能性が探求される。自体的同一性を個体においても普遍においても保証するのが本質である限り、本質を実現する形相は個体としても普遍としても理解されるが、自体的同一性を究極的に実現するのは時空の制約を受けない純粹形相であるという形而上学の見解が与えられる(三九四―五頁)。ただし、その見解を支え、形而上学の可能性を示すのは、ロギコースを大黒柱とする三支柱であり、このことが形而上学においてはじめて純粹形相を語り得るという従来の解釈を乗り越えていることは注目すべき点である。

本書はアリストテレスのテキストの綿密な読解と研究史の緻密な調査に裏付けされた研究であるが、アリストテレス自身ないし研究史が持つ重要な或る主張を迂回しているように見える。すなわち、学構築ないし認識における感覚の役割の重要性が等閑にされ、その役割がピュシコースという学的手法にすり替えられているのである。もしくは、形而上学と自然学のフィードバック、弁証術と自然哲学の相補性に感覚が果たす重要な役目がクローズアップされていないと言ってもいいであろう。しかし、本書は、アリストテレスが実在・本質を探究する道程、すなわち弁証術から自然哲学を通して形而上学へと至るまでの歩みを相補的という斬新な仕方で追った研究としてアリストテレス研究史上に名を残すものである

と同時に、言語分析から心身論、科学論、学問論までを扱ったものとして哲学の今に貢献する書となるであろう。

(二〇〇二年
xiv + 四四三頁)